『大正後期の宝飾文化産業史』―その②の1

P14～19

平和記念東京博覧会―はじめて本場のホールマークを見る

第一次世界大戦終結後の平和を記念し国内産業の発展を期するという主旨のもとに、大正十一年（１９２２）３月10日から７月末まで、上野公園一帯で平和記念東京博覧会が開催された（東京府主催）。

この時は丸嘉や澤田治助などの東京の有力小売店も参加し最近作を披露した（**図2-2-7**）。



図 2-2-7

澤田治助広告

平和博覧会に因んで「平和ピン」と名付けた白甲、ヒスイ、ダイヤ入束髪簪。

東京貴金属製造同業組合からは帯留や指輪を出品。イギリスからも貴金属製品が出品され、多くの日本の業界人はこの時はじめてゴールド・スミス・ホール（金細工師会館）によるホールマーク（品位証明）というものを見たようだ。

ゴールド・スミス・ホールとはナショナル・アソシエーション・オブ・ゴールドスミスが王室から特権を授けられて設立した貴金属会館。業者はここにメーカーマークを登録しておき、検定に合格すると、業者マーク、貴金属の種類と品質マーク、分析所マーク、年号印が打たれる。

まだ日本には貴金属検定がなかった時代なので、これを見た業界関係者は「なるほどなぁ」といたく感心したという(『わが道鍈一筋』⑬)。このイギリスを参考に日本で検定マーク制度が発足するのは大正末年のことである（後述）。

（コラム２−３）

伊東深水の「指」に描かれたプラチナ指輪

平和記念東京博覧会の美術展には伊東深水の「指」と題された絵（絹本着色）が出品され、人だかりが出来るほどの評判だったといわれる。

モデルの丸髷（当時の既婚女性が結った代表的髪型）の女性は大正八年（１９１９）に結婚した妻・好子。

見つめる左手薬指には甲丸のプラチナ製と思われる白い指輪をしている。おそらく結婚指輪だろう。幸福にひたる若妻が、じっと指輪を見入る姿は、写生表現を大切にしていた深水ならではのものといわれる。

なおこの絵は昭和四十九年（１９７４）に切手として発売された。



切手になった伊東深水「指」

切手ではほとんど分からないが左手薬指に白い指輪が描かれている。

『ダイアモンド』―日本初のダイヤモンド専門書

大正十二年（１９２３）３月、幻の著書といわれる岩田哲三郎（尚工舎時計研究所所長）著『ダイアモンド』⑭が山崎商店出版部から刊行された。この著は『宝石百年』（第二部）中の「日本人の対ダイヤモンド観」などにも引用されているが（だが、どうしてか書名や著者名は明らかにされていない）、近年まで長らく所在不明だった。

ダイヤモンドの価値論を中心に、鉱物としての性質、産地情報、さらには研磨加工から取引情報まで岩田が研究し、実際に見たことを網羅した啓発的内容となっている。日本におけるダイヤモンドの歴史も詳しい。

岩田は時計の人であるが、宝石にも強い興味を持っていたようで、

海外出張の際にはベルギーでダイヤモンド加工の現場を見たり、またニューヨークでティファニーを訪ね、副社長のクンツ博士から「ティファニー・ダイヤモンド」の説明も受けている。

この本は、現在読んでも参考になるところが多いが、残念ながら同年9月の関東大震災で焼けてしまったようで、広く世の中に行き渡ることはなかった。

しかし、近年筆者が捜しあてたものを元に、山崎商店の流れをくむ田中貴金属ジュエリー(株)(現在の田中貴金属リテイリング(株))でも入手し、平成二十三年(2011)、復刻出版された(**図2-2-8**)。

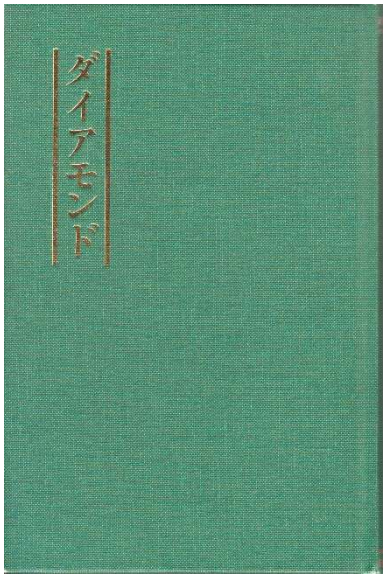


図 2-2-8

『ダイアモンド』表紙(復刻版)

原本を忠実に復刻。復刻出版に協力した筆者と諏訪恭一氏のコメントも載っている。

関東大震災

経済の混乱の中でも貴金属宝石業界は立ち直りつつあったが、これに冷や水を浴びせたのが関東大震災である。

関東大震災が東京、神奈川他、関東諸県を突然に襲ったのは大正十二年9月1日。震度六、マグニチュード七・九の大地震により死者9万人、負傷者は10万人以上という未曽有の被害が発生した。東京、横浜にあった貴金属宝飾店や貴金属工場はそのほとんどが焼失あるいは大きな被害を受けた。

だが、小売店が復興するのは意外に早かった。有力宝飾店である御木本真珠店は同年12月には早くも銀座本店仮建築を竣工。天賞堂も翌年1月には新店舗で商売を始め店舗再建広告を出している(『日本の「宝飾装身具」広告史』5-61)。

当時の状況を『貴金属百話』⑮の中で著者の山本勇三は次のように記している。

「大正十二年に例の大震災が起り一時東京は潰滅し、業界は暗たんたるものであったが、帝都の復興の進むにつれ、業界は復活とい

うよりは一大飛躍という方が当たっている程に好況を呈した。震災後銀座通りに激増したのはカフェーと貴金属とであった」。

大震災で製造業者の解散や閉鎖相次ぎ、錺職人も離散

また菅原真吉（御木本装身具工場嘱託）は「錺のあゆみ」⑸⑯で震災後の様子を次のように書き残している。

「関東大震災は、東京を中心として発展して来た宝石・貴金属装身具業界を一時、休業状態にさせ、機能を停止した。貴金属装身具製作所は解散するもの閉鎖するものが殆んどで、錺職人の多くも地方に離散、販売部門も開店休業で失業者続出の有様であった。東京市内のうち震災で被害甚大であった下町に対し、山手は大部分が災害を免れたことは不幸中の幸となり、一部の錺職は下町から山手に移動して混乱の回復に対処した。12月も末になると震災による影響は目に見えて少なくなり、一応の落着きを取戻し、開店する商店も出始め、（中略）予想されたより早く復興へと人々は立ち上った」。

とはいえ、なかなか立ち直れないほどの大きな打撃を受けた工場も多かった。明治から大正の宝石貴金属界に君臨していた村松本店などは大震災を境に工場の縮小を余儀なくされ、かっての勢いは見られなくなった。

大震災エピソード①―焼けたダイヤも磨けば光る

大震災のエピソードはいくつか残っているがその中から主なものを紹介する。

大震災で利益を上げた会社もある。その会社とは大正六年（１９１７）創業の日本ダイヤモンド㈱で、大震災をきっかけに、それまで低迷していた経営から抜け出せた。なぜかというと「大震災で黒く焼けたダイヤモンドやそのほかの宝石類をみがきあげる仕事が続々と持ち込まれてきたからだ。研磨料金もいつの間にかつり上がって、一カラット百円の高値をよんだ」（『ダイヤよ光れ―浜田義光の半生記』⑰）。表面が焼けて白くなったダイヤでも磨けばまた光るということをこの時、宝石関係者がはじめて知った。

こうした話は他にもあり、三ツ輪屋商店（現在のみつわ）は「焼けたダイヤを買って、それをフランスに磨きにやって大分儲けた」（『三輪豊照回顧録』⑱）という話も伝わる。

大震災エピソード②―プラチナは火事に強い

関東大震災はプラチナは火事に強いという教訓も残した。

震災を体験した松山商店の松山繁三郎は『わが道錙一筋』で、火事によって金製品は溶けて小さな粒になり、そこかしこに散らばり、あるいは灰にもぐってしまい回収できなかった。ところがプラチナの指輪は、そっくりそのままの形で焼け跡に残っていた（融点が高いという特性のため）。その体験から、戦後プラチナを売りにきた南アフリカ・ルステンバーグの業界人の「日本人はなぜプラチナがそんなに好きなのか」という疑問に対し、①日本人の肌の色に合う、②重量感がある、そして③として、「火に強く、不幸にして火事にあっても形が変わらずに回収できる」と答えている。

大震災エピソード③―金、銀の指輪売る人増える

また、松山繁三郎は震災後の一般的話として、「引っ越しのために指輪を売るという人たちが出てきて、買い取りが忙しくて…、幾らでもいいから買ってくれという人が多かった」、自分も焼け跡にすぐバラックを建ててどんどん買い取ったと語っている（『The 宝石』PART. II―座談会・日本の宝石一〇〇年史⑲）。『わが道錙一筋』には焼け跡に建てたバラックの仮店舗の写真が載っているが、それを見ると確かに入り口のところ3枚の内、手前の一枚に「金銀潰（つぶ）し御引取致します」と手書の貼り紙のようなものが見える（**図2-2-9**）。当時はこうして震災直後の生活を凌いだ人々も多かったのだろう。



図 2-2-9

松山商店、大震災直後の仮店舗

『わが道錙一筋』より

〔大正後期編―参考文献〕

13 『わが道鏐一筋』
松山繫三郎　新装飾　１９７９年

14 『ダイアモンド』
岩田哲三郎　山崎商店出版部　１９２３年

15 『貴金属百話』
山本勇二　日本貴金属時計新聞社編　１９５８年

16 「鏐のあゆみ」(5)
宝石と貴金属工芸№１７７　宝石出版社　１９７９年

17 『ダイヤよ光れ―浜田義光の半生記』
日本工業新聞企画・編集　東京ダイヤモンド工具製作所
１９８２年

18 『三輪豊照回顧録』
三輪照豊回顧録刊行会編・発行　１９６０年

19 『The 宝石 PART. II―座談会・日本の宝石一〇〇年史』
読売新聞社　１９７６年